

「あひ…ッ！？♡♡」

ピリリッと鋭い痺れが両乳首から疾^{はし}り、少年は大きくのけぞった。

「ほら。今、ちゃんとなか締まったよ。この感覚を覚えてね。もう一回いくよ」

「ひいッ！！♡」

再び両乳首から鋭い痺れ。

ビクンッとふたたびのけぞって、たしかに、孔の奥が驚きにきゅうっと引き絞られる感じがある。

これは電気刺激だろうか。安全には配慮された道具なのかもしれないが、振動とは違う鋭い刺激が少年には恐ろしかった。

「覚えた？じゃあ今度は自分でやってみて」

「う……っうう……っ♡」

また電気を流されるのが怖くて、必死になって腰の奥を狭めるように腰を浮かせる。

「そう、そう。すごく上手だよ……。よし、もう力抜いていいよ。一回射精しようね」

疲労と力^{りき}みに痙攣する太腿を男は優しく撫でてくれて、中身がぎちぎちになった拘束具をパチンと外してもらえた。

「あああ……ッ！♡♡♡」

びゅくッ！と勢いよく白蜜が噴き出し、少年の腹といわず胸といわず、あちこちを濡らす。

「頑張ったね」

男はそんな少年を、さも可愛いというように見下ろし、頭をなでてくれる。

恐怖に追い立てられた後だけに、こうして褒められると今にも泣きそうな、男にすが縋りつきたいような気分になる。

「じゃあ次は、腰の使い方を教えるよ。よく聞いててね」

男はさりげなく拘束具を少年の竿の根元に嵌めなおすと、自身の腰をずるずると引き去る。

「あ、ああ……………っ♡」

長時間、玩具に苛められた場所を灼けつくような楔に移動されるのがつらい。
けれど男は待ってはくれなかった。

「僕が奥に打ち込んだら、すぐに腰をこうやって、僕に向かって突き出すみたい
にしてね」

こうやって、と言いながら男は少年の腰骨を持ち上げ、グライドするような動き
をさせてくる。

「じゃ、一回やってみるからね」

「ああ……………っ！♡」

ぎりぎりまで抜け去っていた男が、ゆっくり狭路を割り拓いてくる。

そしてついに最奥まで埋められ、あまりの圧迫感と快感に少年は背をのけぞら
せた。

「ほら、腰は？」

「う……うう……っ♡」

繋がされた下半身をぶるぶると痙攣させながら、なんとか先程言われたように腰を浮かせてみせる。男に向かって腰を突き出すと、奥にねじこまれた雁首がいっそう奥へとめり込んでつらい。つらいけれどもそこから強い淫楽も感じ、少年は男に向かって突き出した腰をがくがくと振りたてた。

「そう。上手だよ……。その調子でね」

男はふたたび腰を引き、それから繰り返し、ゆっくりと少年のなかを行き来しはじめた。

「ああ……っ♡あああ……っ♡」

大きな幹で擦りあげられ奥にねじこまれるたび、悩ましい感覚が孔全体に塗りひろげられていく。玩具でさんざんな目に遭わされ、もう刺激などいらぬときえ思っていたのに、気づけば内壁は男を悦んで迎え入れていた。

「そう、そう……。上手いよ」

奥にねじこまれるたびに、なんとか腰を男に向かって浮かせる。

しかし男の抜き挿しがだんだん速くなってくると、次第に腰が疲れて、タイミングが間に合わなくなってきた。そしてとうとう、腰を浮かせることすらできなくなる。

「ほら、どうしたの？腰は？」

「う…っ♡ああ…っ♡♡あああ……っ♡♡」

そのときにはもう、男はぬちゅッ、ぬちゅッと大きく水音を立てながら、絶え間ない律動りつどうを刻んでいた。

奥まで貫かれるたび、ただもう気持ちがよく、少年は腰と言わず脚と言わず、あちこちをビクビクと震わせて身もだえた。

「まあた君、僕の言うこときかないつもりなんだね……？そんな子には、やっぱりお仕置きが必要だね」

男は寝台の上からなにかステンレス製の、マドラーのように細い、棒状のものを取り出す。

それに蜂蜜のようにとろみのある液体をなじませ、その先端を少年の竿の先にあてがうと、

「ひ…ッ！？♡」